

非常に小さくて敏捷な飛翔をみせる本種は、初めて沖縄を訪れた 1993 年に初の出会いをしているが、その沖縄では 1970 年に発見され、1973 年以降普通に分布するようになったようだ。八重山諸島では早くから普通種となっていて、幼虫が食べるアカメガシワに産卵行動を示す母蝶の姿も何度かみている。

Sep. 2, 1993 沖縄名護市平敷：山越えの林道はまわりに緑深い森が迫っていていかにも南国という景観ではあるが、蝶の姿は乏しく、真剣にネットを振ったのはベニモンアゲハが現れたときぐ



らい。小さいタイワクロボシジミがときおりチラチラと飛ぶのでネットに納める。この蝶は藤岡知夫著『図説日本の蝶(ニュー・サイエンス社刊 1972)』には

「沖縄本島でも 1♂が採れた(名護, 1970 年 10 月 7 日, 三角典久)」とあるだけで確実な定着を認める記載とはなっていないが、まちがいなく定着を思わせる個体数を確認。

Feb. 21, 2015 波照間島：好天気です夕のような強い風もなく、集落周辺のシロノセンダングサにたくさんのナミエシロウが吸蜜飛来し、路傍の片隅に複数頭のリュウキュウアサギマダラとアサギマダラが、やはりセンダングサの蜜を求めている場面にでくわす。ナミエシロウの個体数が多く、8 月開催の「青少年のための科学の祭典」で子供たちに提供するアルバム作成用の標本にする目的で、新鮮個体にしばって採集をする。波照間島では最もチョウ密度が濃いことを経験している南ジャングルへと

踏み込むと、ナミエシロウとリュウキュウアサギマダラ以外のチョウとして、前翅翅表にきれいな白紋が目立つタイワクロボシジミの低温期



型♀がチラチラと飛び、たまにリュウキュウミスジも飛び出す。秋の訪問時にみたリュウキュウムラサキ、メスアカムラサキ、アオタテハモドキなどのタテハチョウ類はまったくみられない。